台大日本語文研究第 16 期
2008 年 12 月，頁 61-80
2008- 10-08 收稿，2008-12-22 通過刊登

混合的身體——論《福爾摩沙》時期的巫永福——

橫路啓子*

摘要

巫永福（1913-2008）是現今十分知名的詩人，其於 17 歲時赴日留學，以日語爲母語於日治時期發表許多日語的作品。巫永福的文學創作雖在戰後一度中斷，然而於 1960 年代又重新執筆從事文學活動。在其漫長的文學生涯中，第一個發表作品的舞台是文藝雜誌《福爾摩沙》，這本雜誌是由東京的台灣留學生所成立的「台灣藝術研究會」所創辦。《福爾摩沙》於 1933 年 7 月發行創刊號，而至翌年 6 月發行第三期之後停刊，可謂相當短命的一本雜誌，然而其作爲探討 1930 年代初期台灣知識份子意識的媒介，具有極爲重要的意義。本論首先思考巫永福第一個發表作品的文藝雜誌《福爾摩沙》所具有的意義，以及巫永福於其中所佔之地位。其次，以其兩篇小說〈首與體〉及〈黑龍〉爲中心，思考巫永福的自我認同、民族意識以及身體性等問題。透過詳細的文本解讀，明確地理解巫永福所思考人類所應有的生存方式，以及人體作爲一媒體的身體性，並試圖進一步發掘出其相異於同時期的台灣作家、屬於其獨特的問題意識。

關鍵詞：巫永福、首與體、黑龍、福爾摩沙、自我認同

* 輔仁大學日本語文學系助理教授

Hybrid Body in WU Yong-fu's Works of "Formosa" Period

Yokoji Keiko*

Abstract

WU Yong-fu is a famous poet now in Taiwan. He had studied in Japan from the age of 17, so Japanese was a mother language for him. In period of Japanese occupation, he wrote many works in Japanese. Afterwards, WU Yong-fu's literature activity has continued till now, though it had stopped from 1944 to 1966. The first stage of his long literature life is the literary magazine *Formosa* which was published by the Taiwanese students in Tokyo. Their circle's name was Taiwan Art Research Club. *Formosa* No.1 was published in 1933, and came to an end the next year. The magazine was the short lived, but was very important material for researching the identity of Taiwan intellectuals in the 1930s. This paper describes the meaning of his first media *Formosa* in that period, and the position of WU Yong-fu. After this, I argue his identity, ethnic consciousness and body consciousness. Through close reading, I try to argue about the thought of WU Yong-fu for man's existence, and man's body consciousness, for proving the unique awareness of the issues that were different from those of other Taiwan intellectuals in the period of Japanese occupation.

Keywords: WU Yong-fu, *Head and Body, Black Dragon, Formosa*, identity

* Assistant Professor of the Department of Japanese Language and Literature, Fu Jen Catholic University

混成する身体
――『フォルモサ』時代の巫永福をめぐって――

横路啓子*

要旨

巫永福（1913-2008）は現在は詩人として著名であるが、17 歳で日本に留学し日本語を母語として日本統治時代、日本語の小説も数多く上梓している。その文学活動は戦後、一時断絶するものの 1960 年代に再開するのだが、長い文学人生の最初の発表の場となるのが東京の台湾人留学生によって結成された台湾芸術研究会の機関誌『フォルモサ』である。『フォルモサ』は 1933 年 7 月 15 日に創刊され翌年の 6 月に廃刊する短命の雑誌だが、1930 年代初頭の台湾知識人の意識を知る上ではきわめて重要なものである。本論では、まず発表の媒体となった『フォルモサ』の意味、またそこにおける巫永福の位置を考える。そしてその後、巫永福が『フォルモサ』に発表した 2 編の小説「首と体」、「黒龍」を中心に、そのアイデンティティ、民族意識、身体性などについて論じていく。テクストを詳細に読み解くことで、巫永福の感じていた人間のあり方、一つの媒体としての身体性を明確にし、当時の他の台湾人作家とは異なる彼独自の問題意識を掘り下げて論じようとするのが本論の試みである。

キーワード：巫永福、首と体、黒龍、フォルモサ、アイデンティティ

* 輔仁大学日本語文学科助理教授

混成する身体
――『フォルモサ』時代の巫永福をめぐって――

横路啓子

一、はじめに

1913 年に南投の名家に生まれた巫永福が日本に留学したのは 17 歳の時である[1]。台湾が日本の統治下に置かれてから 18 年後に生まれ、他の留学生に比べ早くに日本に留学した巫永福にとって、日本語が母語としてきわめて自然なものであったことは言うまでもない。その処女作「首と体」を発表したのは巫永福が 21 歳の時、明治大学文芸学科に在学中だった頃で、発表媒体となったのは東京に暮らす台湾留学生によって結成された「台湾芸術研究会」の機関誌『フォルモサ』創刊号（1933 年 7 月 15 日）である。

台湾の歴史とともに文学を営んできた巫永福の歩みは、葉笛によって(1)1932～1941 年、『フォルモサ』、『台湾文芸』、『台湾文学』に小説と詩を発表していた時期、(2)1942～1966 年、執筆活動を停止していた時期、(3)1967～2008 まで詩社『笠』での執筆活動時期の三つの時期に分類されている[2]。このうち本論では、(1)の時期の前半にあたる日本留学時代に『フォルモサ』に発表された二編の小説「首と体」、「黒龍」を中心に留学時代の巫永福の目指したものや台湾人留学生としての巫永福の意識などについて論じていく。

処女作にはその作家のすべてが出揃っているなどと言われるが、巫永福の「首と体」は、巫永福の日本時代の作品についての数少ない研究の中では比較的、論及されている作品である。タイトルの「首と体」という二項対立が、登場人物「S」の内面の相克――日本での留学を継続したいという「頭」と台湾の両親から結婚のため戻る

[1] 巫永福の最初の留学先は名古屋五中である。張恒豪編（1991）『台湾作家全集 翁鬧 巫永福 王昶雄合集』、前衛出版社、p.315。
[2] 葉笛（1995）「巫永福的文学軌跡」『台湾文学巡礼』、台南市立文化中心、pp.63-64。

よう求められている「体」――から名付けられたタイトルであると考えられることが多く、先行研究では主に植民地下において日本に留学した台湾人留学生の民族アイデンティティや思想的分裂、矛盾などを描いた作品として読み解くことが基調となっている。例えば陳建忠は、この作品を台湾人が書いた一連の「留学生もの」のコンテクストの中で読んでおり、「困惑する者」として留学生の分裂したアイデンティティを論じている[3]。また陳芳明は、この作品の中に描かれている植民地文学の典型的なインテリの抱える矛盾を指摘し知識人の「思想」を「首」、「行動」を「体」としている[4]。許惠玟は「獅子の首」と「台湾の日本人」、「羊の首」を「日本の台湾人」と読み、そこから台湾の知識人が日本と台湾という二つの文化の中で分裂した存在となっていると指摘する[5]。このように、この作品については日本でモダンな日常を享受しつつも、葛藤や矛盾を抱え持つ分裂した存在としての台湾人留学生を描いた作品として読まれ、ここから1930 年代の台湾知識人の意識を掘り下げるためのテクストとして扱われてきた。

また『フォルモサ』第三号に発表された「黒龍」は、台湾人の少年「黒龍」を主人公にした作品であるが、実験的な要素が強く完成度には欠けるせいか、これまでほとんど論及されてこなかった。前述の許惠玟の論文では、この作品を「阿煌とその父」と共に父と子の葛藤の物語として読んでいるが、この作品では父と子と並んで主人公「黒龍」と母親との関係もきわめて重要な部分であり、残念ながらこれについては述べられていない。一方、陳芳明の上述の著作では、時代的なコンテクストや巫永福の当時の状況などを足場にしつつ、複数の「祖国」を持つ当時の台湾人のアイデンティティを表現したものとしてこの作品を読んでいる。

---

[3] 陳建忠（1997）「困惑者――巫永福小説〈首与体〉中的留学生形象」、淡水學院主催『福爾摩莎的桂冠巫永福文學會議論文集』。

[4] 陳芳明（1998）「史芬克司的殖民地文學――《福爾摩沙》時期的巫永福」、『左翼台灣　殖民地文學運動史論』、麥田出版、pp.121-140。

[5] 許惠玟（2002）「巫永福戰前小說分析」『中國文化月刊』（第 263 期）、pp.92-111。

こうした作品や作家研究のほかに、施淑や游勝冠らが日本に留学していた台湾人留学生の日本語の作品から 1930 年代の台湾知識人の複雑な心理を読み解き、ポストコロニアル的な視点から葛藤や矛盾などに満ちた台湾知識人のアイデンティティを論じており、この中でも巫永福の作品について論及されている部分がある[6]。こうした言説は確かに興味深い問題を多く含んでいるが、複数の「祖国」とそれに対するノスタルジーを前提にしてしまうと、巫永福の作品が持つその独特なムード――退廃的で幻想的なナルシズムを見逃してしまいがちになるだろう。現在のところ、「首と体」、「黒龍」をテクストとして詳細に読み解く研究は、まだなされていないと言ってよいだろう。特に「首と体」の「首／体」、「獅子の頭（首）／羊の頭（首）」といった二項対立、主人公と「S」の関係、また「黒龍」の主人公の少年「黒龍」と実父母、叔母夫婦、その他の子供たちとの関係などまだまだ論ずべき点が残されているように思われる。本論では、時代背景や政治思想、文学運動の流れなどを踏まえつつ、こうした対抗律が象徴するものや語り手の視点などを考察し、さらにそれらを超えたところで『フォルモサ』時代の巫永福が表現しようとしたものや作者の思惟を探っていきたいと思う。

二、発表媒体『フォルモサ』について

作品を論じる前に、それが掲載された雑誌『フォルモサ』について述べておきたい。

『フォルモサ』は 1933 年 7 月 15 日に創刊号が発行され、翌年の 6 月 15 日に第三号が出て終了した文芸雑誌である。巫永福はこの雑誌の母体である台湾芸術研究会発足時のメンバーであり、そしてこ

[6] 施淑（1995）「首與體――日據時代台灣小說中頹廢意識的起源」（陳映真等著『呂赫若作品研究:台灣第一才子』に収録）、游勝冠（1997）「誰的「首」？什麼樣的「體」？――施淑〈首與體――日據時代台灣小說中頹廢意識的起源〉一文商榷」（淡水學院主催『福爾摩莎的桂冠巫永福文學會議論文集』に収録）。施淑の論文は日本の台湾人留学生全体を論じたもので、台湾人留学生が故郷台湾に対し強いノスタルジーを感じていることを前提としている。また游勝冠の論文は、施淑（1995）を元にして台湾人留学生について述べたもので、思考の枠組みとしては施淑の枠を出ていない。

の雑誌の重要な書き手の一人でもあった。本論で扱う「首と体」はその創刊号に、「黒龍」は 1934 年 6 月 15 日発行の第三号に掲載された作品である。創刊号、第二号に比べ、第三号は明らかにページ数が減っているのだが、これについて施学習は、学生中心の同人誌だったため資金繰りが苦しくなり、第三号ではページ数を少なくし、その後『フォルモサ』の同人たちは台湾で結成された台湾文芸聯盟との合流を決めたと回顧している[7]。

この文芸雑誌を出していた台湾芸術研究会は東京の台湾人留学生が中心となった団体だが、その前身の台湾プロレタリア文化連盟についても簡単に触れておきたい。この団体は 1932 年 3 月 25 日、日本共産党の外郭団体として東京で結成されており、中心となったのは王白淵や林兌、呉坤煌などである。その名が示す通り左翼的な思想を持った団体として当局に目を付けられ、同年 9 月に存在が発覚、解散となり、機関誌などを発行するまでには至らなかった。だが台湾プロレタリア文化連盟の思想は、解散前に発行されたニュース数号から知ることができる。このニュースには、日本留学中の台湾青年としての彼らは、日本人よりも多くの苦痛を持っているとし、台湾人の持つ二重の苦痛――思想の不自由さと母語の使用禁止――が強調されている。彼らが植民地下の台湾人という二重苦を強く意識するようになったのは、日本における集会において台湾語の使用を禁止されていたことも影響していると思われる[8]。

『フォルモサ』を発行した団体である台湾芸術研究会は、この台湾プロレタリア文化連盟解散後、まもなく結成された団体で、前身に比べ政治色が抜け、民族性が強調されたものになっている点に注

---

7 施学習（1981）「台湾芸術研究会成立與福爾摩沙（Formosa）創刊」『1933-1943 台湾新文学雑誌叢刊第二巻』、東方文化書局、ページ数なし。

8 台湾総督府警務局編（1939）『台湾総督府警察沿革誌第二編　領台以後の治安状況（中巻）台湾社会運動史』、台湾総督府（1995 年復刻版を使用、南天書局）、pp.54-55。「吾々は母国人より以上に言論の自由を持たぬ。言語使用の自由すら持たない、（東京では台湾語を使用することが出來ない）集会出版の自由は言語道断だ、所が之等は文化の向上発展には不可缺のものである。台湾の独立的、文化的発展は日本帝国主義の蹂躙に任せ、吾々の享けつゝある文化は帝国主義的被圧迫文化、奴隷文化であつて、真に吾々の生活要求を取り上げてゐる文化ではない。」

意すべきだろう。『フォルモサ』創刊号の「創刊の辞」には、「台湾には固有の文化文芸があったか？」[9]と自問し、「麗しの島」台湾独自の文学を創造していくことを掲げている。実際『フォルモサ』に掲載された文章は、評論であれば台湾文芸の確立を主張したもの、小説や詩であれば台湾を舞台にエキゾチックな台湾の風景や台湾人を描いたものが多数を占めているのである。創刊号で言えば、評論には蘇維熊「台湾歌謡に対する一試論」、楊行東「台湾文芸界への待望」、小説では張文環「落蕾」、呉天賞「龍」などが挙げられる。また詩では蘇維熊が台湾語で読ませる作品を書くなど[10]、台湾色を鮮明に打ち出そうとした編集方針であったことが見受けられる。1930 年代初頭には、台湾知識人の中にも日本語を母語とする者が増加していたが、日本語を母語とするということは、それ自体が日本語的思考法、ひいては帝国的まなざしを内面化しているということであり、『フォルモサ』の登場はまさにそうした新たな台湾知識人の誕生を高らかに宣言したものであったと言ってよい。東京に暮らす彼らが、帝国がどのような台湾を求めているかを敏感に感じ、台湾人として台湾をどう表現していくかを問題意識としていたであろうことは想像にかたくない。

しかし巫永福の作品は、『フォルモサ』のこうした方針とはいくぶん趣を異にしている。「首と体」にしろ「黒龍」にしろ、いずれも台湾人を描いたものでありながら、「故郷台湾」に対するノスタルジーや帝国的エキゾチシズムは他の作品に比べ希薄であるように思われるのだ。彼が描いた台湾がどのようなものであるかは次節で述べるが、彼が他の作家と異なったまなざしで台湾を描くことができたのは、巫永福が山本有三や横光利一、小林秀雄、萩原朔太郎などの作家の作品をむさぼり読み、時には直接指導を受けたことなどが大きく影響しているのではないだろうか[11]。その独自の世界観

[9] 「創刊の辞」（1933）『フォルモサ』創刊号、p.1。
[10] 「唖口詩人」、p.30。
[11] 巫永福著･沈萌華主編（1996）「総序」『巫永福全集』栄神実業、p.9。

は『フォルモサ』時代、他の作品[12]にも見られるものではあるが、小説「首と体」、「黒龍」には特に色濃く表現されているように思われるのである。

三、「首と体」

（一）「S」とは何か

それでは巫永福の独自の世界観とはどのようなものなのだろうか。まずは「首と体」から考察していきたい。

この小説に出てくる人間は、語り手である「私」とその友人である「S」であるのだが、「私」によって語られる「S」とは「私」にとってどのような存在なのだろうか。

「S」は、「私」の中学の時からの友人で、同じ大学の別の学科に入り「毎日の如く会つて居る友達」(62)[13]である。小説の中で2人は大学をサボり酒を飲み、街をぶらつき、芝居を見、デパートやレストランに入り、モダンな東京を存分に楽しみ、常に行動を共にしている。「私」は「S」の性格をこう描写している。

> 彼は実に気の優しい男である。飴より甘さうな性格である。自分の早生で父母が非常に良くして呉れたと同様彼の心は父母にあつた、小さい時から体が弱いので彼の感情は鋭く父母の心を反映し、大きくなつて体が強くなつてもコスモスの花よりも枝よりも寂しく細く優しい男である。(62)

しかし、彼の外見については「私」より背が高く、帽子を被っているということを除いて、ほとんど述べられていない。「私」という語り手から「S」に関する外見の情報は得られないのである。「私」が「S」の外見を語ろうとしないのは「事実の顔よりも隠れた顔の方が却つて彼の心の真実性を示して居るやうに見え」(64)るからか

---

[12] 『フォルモサ』第二号の詩作二編と戯曲「紅緑賊」など。

[13] 本論では「首と体」と「黒龍」のテクストとして『フォルモサ』創刊号（1933年7月15日）及び『フォルモサ』第三号の復刻版（台北：東方文化書局、1981）を使用した。本文でテクストを引用した場合は、ページ数をその後に括弧で示した。

もしれない。

語り手によって物語に表出しないのは「S」の外見だけではない。「S」が自らの考えを語る言葉もきわめて少なく、また行動する時も「私」に対して無言のままである。そして「S」のそうした無言の行動に「私」は完全な同調を見せる。木枯らしの吹く東京の街を歩く彼らはデパート「美松」に向かうが、それは「誰の意志でもない、無意識に近い、お互の意志が交感され向かれた足の方向が美松だつたから」（61）である。美松を出た後、2 人は再び街をぶらつくのだが、「私」は「S」の帽子に隠れた顔をのぞき「彼の心の波が私に無言通信をしたかのやうに」彼の心の闇を感じ取り、暗然とするのである。「私」は言葉を持たない「S」との精神的な同調について、「相手の心の線を分明に知る」（61）ことができると語る。彼らの心は「離れた二線が交はるやうに（平行線では断じてないので）随所に交叉し離れ、一致点が出来たり、平行したり」（61）しながら、互いの感情を無意識のうちに直接感じ取り、無言のコミュニケーションを成り立たせているのである。

こうして見てくると、言葉を持たずに神経の交感によって成り立つ 2 人のコミュニケーションは、二人の人間の間にあるいわゆる友情や愛というよりは、一人の人間の頭と体の反応、あるいは一人の人間の心の中の対話であるように見えてくる。言ってみれば、「S」はまさに「私」にとっての「エス（Es)」のような存在なのである。「エス（Es)」とはフロイトが提唱した精神構造の一部で、エス、自我､超自我の三つに区分される構造の中で最も本能的なものである。本能的性欲動の源泉である「エス」は、快楽原則に支配され、無意識であることが特徴である[14]。意識的な思考を持たず常に「私」に同調して存在する「S」、言葉を持たずに行動する「S」は、まさに「私」の「エス（Es)」そのものなのである。いわば「私」と「S」は本来は一つの個体、一つの自我だったものが分裂して二人として存在しているかのように書かれているのである。

[14] 中島義明等著（1999)『心理学辞典』、有斐閣。

「私」と「S」が一つの個体の分裂した存在であることは、「S」の悩みからも伺える。先行研究では「S」の悩みとは、台湾の両親から結婚するように言われ、「S」は「頭」では東京に残りたいと考えているが、「体」は台湾に戻らなければならないと読まれている。だが「S」の悩みとは「首と体」(62)、つまり「私」と「S」という「首と体」のような関係にある2人が分裂させられることだと思われるのである。「S」の悩みは「私」によってこう語られている。

> 事実私共は近日中に別れねばならぬと私は思つて居るが彼は別れたくないと考へて居るのだ、首と体の相反した対立である、何故なら彼は東京に居たいと願ひ、彼の家では彼の体を要求して居るからだ「帰郷せよ」とは屢々彼の家から手紙で要求して居る。(64、強調引用者)

つまり「S」にとっての悩みとは、「私」とは別れたくないこと、東京に居たいのに家族から帰郷を迫られていることであり、「私」と別れるということが「首と体の相反した対立」を生じるものとなるのである。「S」はその後、帰国を決意し、それを「私」に告げた時も「私」はその決定にはまったく驚かない。なぜなら「私」は「S」がそう言う前から「彼が帰るであらうことを知つて居る」(65)からである。「S」=「エス(Es)」の帰郷、それはまた「私」自身の分裂――「私」の自我の一部である「S」と「私」が引き裂かれることを示すものなのである。

(二)「獅子の頭」と「羊の頭」の示すもの

「S」と東京の街をあてもなく歩く「私」の頭を占めるのが、「獅子の頭(首)」と「羊の頭(首)」という対立項である。この2つは何を示しているのだろうか。「獅子の頭」が最初に現れるのは、「私」と「S」が酒を酌み交わした翌日のことである。

> 二人は聯隊前を歩いてゐた。階行社まで来ると私の目に殊更らしく目についたのは獅子の頭だつた。毎日毎日学校へ出るのに少しも気が付かなかつたこの頭が聯隊の方を向いて口を開けてゐる、口の中に噴水口をくはへて大きな目をしてゐる、噴出

口から少しづつ出て来る水は凍えて光つて居る、私共の側を強い裂くやうな風が通つて行つた。(60)

「聯隊」、「階行社(偕行社)」[15]といった大日本帝国の軍部を象徴する記号を伴って現れた獅子の首を、主人公「私」は「靖国の御社」を守るものとして見ている。「私」にとって獅子の頭とは、帝国の威厳を守り力強さを示す存在、いわば帝国の暴力、弱者を有無を言わせずねじふせる力そのものだと言ってよいだろう。

一方、羊の首が出てくる場面はというと、芝居の開演まで時間をつぶすため街をぶらついている時で、「私」が強い北風に吹かれ「便所前の手洗とぶつかつた」途端であった。「私」は羊の頭を「曲がつた長い角が再び頭の肉に喰ひ入つて居るこの頭は口を開けて水を吐いてゐた。チュルチュル静かな音が一杯になつた盆の水を音もなく外へ流してゐた」(63)のである。羊が持つであろう唯一の武器である角を自らの体内に食い込ませ、ただ黙々と水を吐き出す羊、それは、武力を封じ込められ帝国日本に搾取され続けている植民地台湾、ひいては自らの武力を奪われ、抵抗する言葉も持たない弱者そのものの存在を示しているように思われる。

だが獅子と羊という対立した2種の動物は、物語の最後に再び登場し、奇妙な動物へと変化する。獅子と羊が再登場するのは、「私」と「S」が芝居を見終わりレストラン「モーリ」に入り注文をしている最中であり、「私」はテーブルの鈴から獅子を連想し(あるいは鈴の上に獅子の幻想を見たか、鈴の上に獅子らしき図柄が描かれていたか)、そこから偕行社の獅子を思い出し、さらに羊の頭を思い起こす。しかし「私」の頭の中では、これらの動物が勝手に姿を変え、暴れ出すのである。

獅子の頭を持つた羊の体、獅子の体に羊の頭をくつつけた二匹の怪獣が加速度的に走つて来た、猛烈な勢で衝突して来た、

[15] 『大辞林』によると「明治 10 年(1877)に創立された、陸軍将校の親睦および学術研究を目的とする団体。第二次大戦後に解散したが、のち親睦団体として復活。」と記されており、帝国陸軍を現したものであることがわかる。

私は堪えられず眼をつむると彼のエヂプトのスフインクスがニヨキツと現れた。二つの怪物の勝負がつかぬのにスフインクスが出て来たので私は思はず面喰つてしまつた。

（略）

私はスクインクスを考へた、何故スフインクスがあつたのだらうと、スフインクスはかつて或る王に依つて謎をかけられて居る」、すると二匹の動物が一匹になつて何とも分らない胴体が両端に獅子と羊の頭をつけて居る、――これが人間といふものだらうか。（66）

前述したように獅子が強者―日本帝国であり、羊が弱者―植民地台湾であるのだとすれば、「獅子の頭を持つた羊の体」や「獅子の体に羊の頭をくつつけた」奇怪な動物たちは、先行研究が指摘するように台湾という植民地から利益をむさぼる在台の日本人や日本帝国、帝国に抵抗すべきでありながら帝国内部にあってその近代性を享受する日本の台湾人留学生と読めなくもない。しかし、これらの奇怪な動物の中に突如としてスフィンクスが現れたことを考えれば、「獅子＝日本帝国（強者）」、「羊＝植民地台湾（弱者）」、「奇怪な動物たち＝越境する人々（在台日本人／台湾人留学生）」としてこの作品の読みを終えるわけにはいかないだろう。獅子の頭と羊の体の動物、羊の頭と獅子の体の動物、獅子と羊の頭を胴体に付けた動物、そしてスフィンクス。「首と体」の最後に現れる奇怪な動物たちはいずれも首と体が異なった種類のものを合わせ持つ混成的な個体である。周知の通りスフィンクスは、こうした混成性を持つ動物の中でも悠久の歴史と多くの伝説を持つものであり、「私」が幻想した奇怪な動物たちの長である。だが、主人公「私」が混成的な体の動物たちを思い浮かべた時に「これが人間といふものだらうか」と語ったのはなぜか。巫永福にとっての身体、人間とは何なのだろうか。これを知る手がかりとして、1934年当時、東京に留学中だった巫永福が書

いた短い評論「吾々の創作問題」[16]を見てみたい。

この評論は、「吾々の創作問題」とは題されているが、実際に述べられているのは、一つの人種としての台湾人の成り立ち、あり方である。台湾人が一民族として本質的に存在しながらも、決して常にそれが純粋に存在しうるわけではないことが強調されているのである。この評論の中で、巫永福は時代や環境、気候などから受ける変化を「屈折」と呼ぶ。それは単に台湾が日本の統治を受けたことによって発生する屈折だけを述べているのではない。台湾人が先住民を教化したことによる屈折、異文明であった日本文化による屈折、西洋文化による屈折、また台湾人が「かつて母国と呼んだところの中華民国の諸動性」[17]による屈折など、歴史、政治など後天的要素をすべて含んでいるのである。そして、先天的な要素や後天的な屈折を持つ自分を観察し、感じること、それこそが創作の原点だと述べる。ここで強調したいのは、巫永福がこうした後天的な屈折や変形について良し悪しを判断する立場にはなく、その後天的な屈折を民族や時代を超えた人間のあり方そのものだと考えている点である。

> 彼は自己を中心にして自己の人間性と神性の距離を量り。自己を一つの河川のやうにして流れ、自己と他との距離を客観しながら、唯一になつて流れて行く。（略）即ち彼の河川の中に水がある。水の中に汚物、菌が流れ、木片が流れる。水底には大小の石が横たはり、土砂があり、沈殿がある。水の中に生物がある。水には天体が映り、諸事象が映つてゐる。而も彼の河川は依然として自己の流れを流れて居る。彼は自己の究局点まで終点まで流れて行くのである。[18]

巫永福にとって、人間とはさまざまな政治的な要素や歴史、風土気候、環境を受け入れていく存在なのである。そして時代や環境、思想、政治などによって屈折していくのは台湾人だけではない。人

[16] 巫永福「吾々の創作問題」『台湾文藝』創刊号（1934 年 11 月 5 日）、pp.54-57。本論では復刻版（台北：東方文化書局、1981）を使用した。
[17] 巫永福「吾々の創作問題」、p.54。
[18] 巫永福「吾々の創作問題」、p.56。

間そのものが後天的な要素によって屈折していく存在なのである。「首」と「体」が異なる動物の部位から成り立つスフィンクスは、まさに人間そのものであり、巫永福は人間の持つそうした混成性、あるいは混成的にしか生きられない人間というものを、東京に暮らす台湾人留学生によって描き出したのである。

四、「黒龍」—無意識に操られる身体

「黒龍」という台湾人の少年を主人公としたこの物語は、未完であることも関係しているかもしれないが、多くの登場人物が登場しながらそれぞれについて説明不足な部分が多く、一つの作品世界としては物足りない感が否めない。物語は主人公の少年「黒龍（本名は士林)」の性格や幻想についての描写は多いのだが、それらは一つの作品世界をなしているというよりは、エピソードのかけらを寄せ集めたものにすら見えるのである。映画のシーンが切り替わるようにさまざまなエピソードがつなぎ合わされる手法は、あるいは巫永福の文学創作の師であった横光利一の影響によるものかもしれない。このように「黒龍」は技術的に未熟な作品ではあるのだが、だからこそかえって当時の巫永福の意識をありのままに表しているとも言えるのではないだろうか。

「首と体」が「私」と「S」という一個の人間のような存在を描いた物語であったのとは異なり、「黒龍」は少年黒龍を中心に、その両親、叔母一家、彼の友人など多くの登場人物の人間関係を描いたものである。先行研究では前述したように父と子の関係に焦点を絞った論もなされているが、作品の中で重要なのは黒龍とその父母との関係なのではないだろうか。

黒龍の父は厳しさの中にも黒龍への愛が感じられるような人物であるが、祖父からの財産で生活しており実質的に無職だった。祖父から受け継いだ財産も父の病気の薬代として消えていき、最後には土地を売るしかなくなる。黒龍の父の死が訪れるのは、この土地が売られるのとほぼ同時であり、黒龍の最愛の人である母がなくなる

のも、父が死んでまもなくのことであった。黒龍は父に対しては愛の中にも威厳を感じ取り、一定の距離を保っているが、母親に対しては強い執着や甘えを示す。母親に対しては「時々粗忽であり、無感覚であり、時には母に対して極度に残忍な『母が自分につくすのは当然だ』といふ考へを追払ふことが出来な」（8）いでいる。黒龍にとって母から自分への愛は当然の権利であり受けられるべきものであった。その体の弱い両親の死は黒龍の想像をかきたてるものであったが、父親の死に関しては死の前から「父は死ぬ。僕は父のために媽祖様にお祈りしやう。」（7）と父が死ぬことを予想し、その予想を自ら受け入れるのである。このように母への強い思慕、父の死を積極的に受け入れようとする少年の心は、両親に対する相反した感情の現れであるように思われ、それはエディプス・コンプレクスを容易に想像させるものである[19]。

黒龍は物語の最後に無意識のうちに母の墓の前で一晩を過ごし、この習作のような作品のクライマックスのようなものを作っている。「どうしてあそこへ行つたのだらう。どうしてあそこまで行けたのだらう。」（19）と少年は自問自答し、これが彼にとっての「不可知の謎」（19）となってしまう。

ここで注目したいのは黒龍の無意識性である。黒龍の言葉に注目すると、墓前の前に行き一晩を過ごしたという事実よりも、それが無意識のうちに行われていることが非常に明らかに強調されているのである。黒龍は自分の行動について、

> 「どうしてあそこへ行つたのだらう。どうして、あそこまで行けたのだらう。途中水田の泥の中へ、小川や、樹木やにどうしてぶつからないで行けたのだらう。私は自分が墓まで行つた路

[19] 陳芳明は、『左翼台湾』（p.135）で黒龍のこの行動から作品全体を振り返り、作品の中に母親の描写が多くなされていることから、「母親＝台湾」とし、台湾への母体回帰の願いを意味すると言えるのではないかと述べている。この論から考えれば、少年黒龍の父親は中国を象徴しており、そのエディプス・コンプレクスは弱体化して台湾を救えない中国に対する感情の裏返しとも読めるが、この作品のメタフォリックな読みに関してはまた機会を改めて論じたい。

順を知つてゐない。全然知らない。母が私を連れに来たのだらうか、私は何も見えないで、聞かないで行けたのは不思議だ。若し私が完全に醒めてゐたら、おぼろであつても少しは覚えて居る筈だ。母が連れに来たのなら、母の姿が見えた筈だ。」(19)

と語る。つまり黒龍は頭で思考することなく、無意識のうちに体だけがそこへ行ってしまったことが繰り返し強調されているのである。

また叔母一家（特に叔父）は、黒龍が母の墓前で一晩を明かしたことは、日頃叔母の家で虐待を受けていることを世間に知らしめるための行為だと考え、侮辱を受けたように考えるが、黒龍にそうした意識はない。しかもここで黒龍は、母の墓前に足が向かった時に母の姿さえまったく見ていないのである。これらの点から考えれば、黒龍が母の墓前に行き一晩を過ごしたという事件は、黒龍の体に刻まれた記憶、その記憶によって動かされる身体そのものを表現していると言えるのではないだろうか。純粋な一つの媒体としての少年黒龍は、最初は引っ込み思案で家にこもりがちだが、実の父母や叔母一家、近所の少年阿淋や同じ年頃の友人たちの影響を受け、次第に家を出、外に出て行くようになる。その中でまた彼の身体には、多くの要素が入り込み、汚されていくのだ。それは少年の意識を超え、無意識に体そのものに取り込まれ、刻み込まれていくのである。無意識のうちに母の墓に向かって走っていく彼の体は、彼の意識を超えたところでそういった雑多なものに貫かれた身体性そのものを表現しているのである。

五、おわりに

「黒龍」の次に巫永福が発表した評論「吾々の創作問題」は、こう始まっている。

吾々は台湾人である。吾々は吾々が此の世に生れ出たと同時に宿命的な必然的な遺伝的諸性向を持つてゐる。吾々の性向はその気質や体質に現はれて来る他種族との相違を示す。その故に吾々は台湾人である。即ち吾々は一人種なのだ。(54)

巫永福は自らが台湾人であることを誰よりも強く感じ、そしてそれを正面から見つめようとした。巫永福にとって台湾人であることを認めることとは、台湾人である自らの体に知らぬ間に刻み込まれていた歴史や思想、環境の変化を見つめ、それらが織り成す自己撞着、矛盾、葛藤、自己憐憫などをありのままに描き出すことであった。「首と体」では、自らの分身のような存在「S」と共に過ごす留学生活の中で、「黒龍」では無垢な少年の体を過ぎていく数々の事件、経験を通じて、巫永福は自分が考える人間のあり方を描き出そうとしたのである。

巫永福が他の日本統治時代の作家と大きく異なるのは、プロレタリア文学が基調だった当時の台湾新文学界の中で、ただひたすらに芸術や人間といった本質を追い求めていた点である。それは彼が日本におり、かつ日本のプロレタリア文学が崩壊した後、文芸復興を積極的に進めた横光利一を師としていたことが大きいだろう[20]。「首と体」にしろ「黒龍」にしろ、主人公の頭に浮かぶ幻想が小説に新感覚派に似た色合いを付け加えていることは確かだ。1930 年代以降、台湾人作家の中には帝国の求めに応じて異国情緒的な視点を借りて台湾を描き出そうとする者も出てくるが、巫永福は自らが台湾人であることを外から、冷静だが包容力のあるまなざしで見つめ、台湾人を描くことで人間そのものを描こうとした。その視線は自分に対しても常に一定の距離を持っている。だからこそ、主人公「私」の幻想を鮮やかに描き出し、また「私」の自我の一部としての「S」を創造することができたのであり、「黒龍」では台湾人のアイデンティティの分裂というよりは、本来的に分裂しながらも一つの個体として生きている人間そのものを描きえたのではないだろうか。

[20] 横光利一は新感覚派の旗手としてプロレタリア派との論争を続けており、1934 年には「純粋文学論」で「純文学にして通俗小説、このこと以外に、文藝復興は絶對に有り得ない」とし、日本における本格小説の到来を主張している（引用元：『定本横光利一全集』第）。巫永福は横光利一から直接、小説創作に関する指導を受けたと述べており、作品における影響関係については今後検討していきたい。

参考文献

中島義明等著（1999）『心理学辞典』、有斐閣

台湾総督府警務局編（1939）『台湾総督府警察沿革誌第二編　領台以後の治安状況（中巻）台湾社会運動史』、復刻版（1995）南天書局

巫永福著･沈萌華主編（1996）『巫永福全集』第 11 冊、栄神実業

張恒豪編(1991)『台湾作家全集　翁鬧 巫永福 王昶雄合集』前衛出版社

陳芳明（1998）『左翼台灣　殖民地文學運動史論』麥田出版

横光利一（1998）『定本横光利一全集』第十三巻、河出書房新社

巫永福（1934）「吾々の創作問題」『台湾文藝』創刊号復刻版（東方文化書局）1981 年、pp.54-57

施淑（1995）「首與體——日據時代台灣小説中頽廢意識的起源」陳映真等著『呂赫若作品研究:台灣第一才子』聯合文学、pp.205-223

施学習（1981）「台湾芸術研究会成立與福爾摩沙（Formosa）創刊」『1933-1943 台湾新文学雑誌叢刊第二巻』東方文化書局、ページ数なし

許惠玟（2002）「巫永福戰前小説分析」『中國文化月刊』第 263 期、中國文化月刊雜誌社、pp.92-111

游勝冠（1997）「誰的「首」？什麼樣的「體」？——施淑〈首與體——日據時代台灣小説中頽廢意識的起源〉一文商榷」淡水學院主催『福爾摩莎的桂冠巫永福文學會議論文集』ページ数なし

葉笛（1995）「巫永福的文学軌跡」『台湾文学巡礼』台南市立文化中心、pp.63-64